

毛沢東からの贈り物

—毛沢東崇拜のなかのマンゴー効果—

増子保志

日本国際情報学会

1. はじめに

1968年8月7日付けの『人民日報』は、一面トップに、「最大の思いやり、最大の支持、最大の鼓舞」と「最大」という言葉を羅列し、見出しには、大文字で「我等の偉大なる領袖は、永遠に群衆の心とつながっている。毛主席は外国の朋友から送られた貴重な礼物をそっくり首都工農毛沢東思想宣伝隊のために転送した」

この領袖様が贈った群衆の心と永遠につながっている“もの”、このありがたそうな貴重な礼物とはどのような“もの”であったのだろうか？

2. 追われた紅衛兵

1968年、北京は紅衛兵たちで溢れかえっていた。彼らは手に『毛沢東語録』を持ち、「反革命」の家の搜索を行い、批判大会でそれらを吊し上げて、武力闘争を繰り返した。大学入試の廃止によって学生たちが街に溢れかえり、北京は混乱状態に陥った。

毛沢東は、利用価値のなくなった紅衛兵を北京から追放せんがため「労働者階級がすべてを指導しなければならない」として、労働者毛沢東思想宣伝隊を全国の中高大の各学校に進駐させ紅衛兵の内紛の鎮圧を図った。

毛沢東への忠誠心を競い合うべく反目し合った紅衛兵達に毛沢東は見切りをつけ、労働者毛沢東思想宣伝隊を手先にするため次の行動にでるのである。

3. 毛沢東になったマンゴー

「労働者宣伝隊は学内に入るやいなや、われわれ労働者階級が学校を占領する。毛主席がわれわれをよこしたのだ、とのべた。一人は手に、プラスチック製のマンゴーを持っていた。」ⁱⁱ

毛沢東は、1968年8月5日、時のパキスタン外相アルシャッドハッサンから贈呈された熱帯の果物マンゴーⁱⁱⁱを精華大学に進駐している首都工農毛沢東思想宣伝隊に贈った。北京の労働者達はこのことを「労働者階級に対する最大の支持」と歓喜の声を上げ、街頭でパレードを行い、民衆大会を開くなどお祝いムード満載で大歓迎した。

さらに、このマンゴーを供え物のように恭しく祭壇である「忠字台」に供え、忠誠を誓った。また、労働者達は、マンゴーの前を通る時、一列縦隊をつくり、恭しく一礼をして通り

過ぎるなど、マンゴーは毛沢東そのものの様に取り扱われた。

毛沢東になったマンゴーは、祝賀パレードの先頭になり、メインストリートを闊歩し、厳重な警備をされつつ、「玉座」に安置された。

毛沢東化されたマンゴーは「無上の幸福」のありがたい贈り物として、防腐処理を施されて、全国各地の労働者に贈られた。^{iv}各地では、大掛かりなマンゴーの歓迎大会が開催された。福建省では、約15万人の人々が、マンゴーを先頭に飾り立てた自動車で華々しくパレードが挙行された。

また、福建省では「喜び勇んで黄金のマンゴーを迎え、心は真っ赤な太陽に向かう」という論文^vまで発表された。ここで、マンゴーは太陽の象徴であり、毛沢東の分身、化身であった。労働者達は、マンゴー一切れを大鍋で茹でて、その煮だされたスープを一杯ずつスプーンですくってすすったという。

男女の宣伝隊の面々がマンゴーを取り囲み、それぞれが『毛沢東語録』を手にかざして、歓喜の声を挙げている。中央にいる隊員は、片手を挙げている毛沢東の写真を張り付けたプラカードを持ち、その前にあるテーブルの上にはマンゴーが山のように積み、^{vi}「敬祝毛主席万寿無疆」の紙が置かれている。

当時の毛沢東は自分がかつての皇帝のように扱われることを意図していたのだろうか。この写真について、草森紳一は写真の上左端に、中国諜報機関の長であり、文革小組の顧問である康生^{vii}らしき人物が『毛沢東語録』をかざしている姿が写っているとしていることから、この件は康生が仕組んだものではないかと推察している。^{viii}

『百日戦争』の著者である W.ヒントンは、この毛沢東からの贈り物を一つの事件とし、「その夜、ほとんどの人々は眠らなかった。あらゆる人(精華大学に進駐した労働者宣伝隊)が、直接に毛沢東から送られたマンゴーを見たりさわったりしようとした」「マンゴーはガラスのケースに収めて保存され、主要な工場の応接室に展示された。やがてこのマンゴーの模造品がたくさん製造され、精華大学の鎮圧に参加したすべての工場に飾られたのである。まるで宗教的な聖遺物—仏陀の髪とかキリストを磔刑にした十字架の釘とか—に対するのと同様な真の崇拜がこのマンゴーをめぐるまきおこった」^{ix}と書いている。

食べられない聖遺物と化したマンゴーの話は中央宣伝機関の思惑とともに中国全土に拡大し、紅衛兵に代わって労働者階級の宣伝隊がとって変わったことの象徴ともなった。

また、マンゴーは、宣伝隊自身の存在を正当化する“もの”として使用された。紅衛兵が宣伝隊から尋問を受けたとき、宣伝隊員が「いいか！毛主席が俺たちを派遣されたのだ！主席はそのうえ、労働者にマンゴーを贈って下された。食べるのがもったいなくて、ホルマリンにつけたんだ！主席は、俺たち労働者の赤い太陽だ！」^xと述べ、いかにも、自分たちが毛主席の分身だのごとく振舞っていたのである。マンゴーという毛沢東からの贈り物を所有することで一般大衆よりも優位にあると主張することになった。

4. バッジの中のマンゴー

1966年に始まった文化大革命は、毛沢東崇拜を大きく加速させた。『毛沢東語録』や『毛沢東選集』などの紙媒体と並んで、中国人民の左胸につけられ広く普及したのが、毛沢東バッジである。

毛沢東バッジの歴史は意外に古く、そのルーツは、抗日戦争期の延安に求められる。毛沢東の崇拜は文革期に突然始まるのではなく、それ以前からも沢東自身が権力の象徴としてバッジを利用していた。

文革期間、特に1966年～1968年の3年間は圧倒的な多さで毛沢東バッジが生産され、民衆の間に深く浸透した。この時期、中国国内29省市自治区には1000あまりのバッジの製造工場が存在し、バッジの種類は数十万種に及び、80億枚製造された。材質はアルミ、鉄、プラスチック陶磁器、竹、貝など様々な素材で制作され、変化に富んだものであった。

その毛沢東バッジの中にバッジの中央の毛沢東の顔の下にマンゴーが描かれたものが存在する。また「芒果」という文字が刻まれているのも存在する。

毛沢東バッジ研究家の櫻井澄夫によると、櫻井が所有しているバッジに刻まれたマンゴーの数は1個から8個まであり、理由は不明であるが、7個が最も多いとのことである。表面に記された文字には「穎穎芒果恩情深」と書かれているという。[※]制作年は、1968年から69年にかけてで、69年に開催された中国共産党第九次全国大会記念のバッジも存在する。制作した組織は、化学工業部、人民解放軍102部隊、四川省国光革命委員会など多種多様の組織で制作された。

毛沢東バッジは、当時、「付けるべきもの」であり、「持つべきもの」であった。毛沢東バッジは、政治的な場面や状況で意図的に配布され、流布した「もの」であり、共産党的なイデオロギーを強く帯びた政治的な「もの」であり、そこにマンゴーが描かれたことは、マンゴーさえ神格化の対象たりうる「もの」であった。

5. おわりに

一般大衆に向けたこのマンゴー効果のポイントは、

- ① 毛沢東からの贈り物（プレゼント）というサプライズ性
- ② 当時、マンゴーという果物が中国人大衆には「未知の果物」であったという珍貴性
- ③ このマンゴーには数に限りがあるという希少性である。
- ④ マンゴーを毛主席から直々に託されたということから、毛沢東思想宣伝隊の正当性を主張する機能

を果たしたと言える。

文革期における毛沢東崇拜は、『毛沢東語録』、毛沢東バッジ、肖像画などいわゆる毛沢東グッズを利用した。このマンゴーもある意味、毛沢東グッズであり、毛沢東の神格化に寄与したものと言えよう。まさに、たかがマンゴーされどマンゴーである。

（付記）

上記、毛沢東からのマンゴーに関するの写真は著作権の関係から当レポートには転載しませんでした。どの様なものか、ご覧になりたい方は下記アドレスからご覧ください。

<http://www.bbc.com/news/magazine-35461265>

(参考文献)

- W.ヒントン、春名徹訳『百日戦争—精華大学の文化大革命—』平凡社。1976年1月。
牧陽一、川田進他『中国のプロパガンダ芸術』岩波書店。2000年9月。
櫻井澄夫『中国・食と地名の雑学考』田畑書店、2005年6月。P212-217。
草森紳一『中国文化大革命の大宣伝』（上）芸術新聞社、2009年5月。P210-219。

-
- i 紅衛兵に対する下放運動。「知識青年が貧農下層中農の再教育を受けるべき」とした。
ii 馮驥才『ドキュメント 庶民が語る中国文化大革命』講談社。1988年12月。
iii 送られたマンゴーの正確な数は不明だが、写真を見ると37個までカウントできる。
iv 『人民画報』1968年10月号。「北京紡績工場にマンゴーが贈られる」
v 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』台北、時報文化出版企業有限公司、1994年。p484。
vi 「万寿無疆」（まんじゅむきょう）は封建時代の皇帝に捧げられた言葉。
vii 康生(1898-1975)中央文化革命小組顧問、中国共産党中央調査部長を歴任。
viii 草森紳一『中国文化大革命の大宣伝』（上）芸術新聞社、2009年5月。p211。
ix W.ヒントン、春名徹訳『百日戦争 精華大学の文化大革命』平凡社、1976年1月。p 291。
x 草森同上、p226。
xi 櫻井澄夫『中国・食と地名の雑学考』田畑書店、2005年6月。p216。